

二学年 学年だより

No. 8 【1月号】

令和3年1月8日発行

令和3年の幕開け、1月にコラムを書くことになるなんて、何かネタはないか？そんなことを思いながら、一つの疑問に突き当たった。それは、「なぜ1年の始まりがこのタイミングなのだろうか？」ということである。色々調べた結果、国立天文台のホームページにその答えが掲載されていたので紹介する。

現在の西暦のルーツは、古代ローマの時代（約2700年前のイタリア）にあるようだ。その頃、1年は10カ月しか「割り振られていなかった」という。12カ月には、2カ月足りないことになる。正確には足りない、のではなく、〇月という名前すら与えられていなかった期間が2カ月間あったというのだ。その2カ月が、今の1月と2月だった。当時のローマ社会は、農業を中心とした生活様式であった。農業のできない1～2月は、名前をつける必要もなかったのである。文字通り「冬ごもり」の期間だったのだろうと想像する。その後、それでは都合が悪いという理由から「1月」「2月」の名称がつけられ、そして「1月」に1年の始まり役割が与えられたのだという。つまり、1月と2月は古来、「な～んにもない月」だったということになる。

確かに、寒いだけの静かな「1月」である。そんな1月1日に元旦が置かれている。もし、元旦が他の月日に移っていたらどうだろうか？新学年は4月1日から始まる。4月1日を元旦にしてみたら、どんな感じだろうか？「…次のニュースです。元旦の4月1日、満開の桜が各地で見ごろとなり、花見客で大賑わいです…」、何とも気忙しい1年の始まりである。「…例年よりも気温の高い日が続く元旦の4月1日、残念ながらすでに桜は散ってしまっています…」、正月から縁起でもない。諸外国は、9月1日から新年度である。ならば9月1日を元旦にすればどうか。「…元旦の9月1日、日中の最高気温が35℃となる中、ここ東京の〇〇神宮では初詣客で長い行列ができていました。しかし、待ち時間の間に熱中症で倒れる人が続出、現場は一時騒然とした空気に包まれました…」、大変な正月だ。しかも汗まみれで正月を迎えたくない。ということで、何もない1月1日がお正月にふさわしいようである。

今年は、近年の暖冬とは異なり厳しい寒さの中、年が明けた。何もなくていい、ただ平穏であればそれでいい。こんな「ありふれた願い」を、今年ほど強く思ったことはない。何もなくていい、ただあなたたちが松山中央高校で努力を積み重ねる日々が続けば、それでいい。そんな1年であることを祈念する。
(207HR担任)

年末年始、家庭でゆっくりできましたか？特に外出もままならない今年は、好きなテレビ番組を見て過ごした人も多いのではないのでしょうか。年末の紅白、新年の箱根駅伝。私は、毎年大みそかのジルベスターコンサートを楽しみにしています。ある曲を演奏し、曲の終わりと同時に新年を迎えるカウントダウンのイベントです。今年は生誕250年を迎えたベートーヴェンの交響曲第5番「運命」から4楽章が演奏されました。この楽章は9分前後で演奏されるので、逆算してスタートをすれば良いわけですが、音楽は生もの。時間だけに追われると深みのない薄っぺらい音楽になりがちです。そこが指揮者の腕の見せ所。感情を込めながら、時間も計算し両者のバランスを取り表現するわけです。今年は大成功、演奏が終わると同時に新年を迎えることができました。指揮者も奏者も、また司会者やプロデューサーもほっと一安心でしょうね。

2年生のみなさん。3年生へ向けた新年が始まりました。あと一年です。音楽の流れと同じく、動いたり止まったり、沈んだり登ったりしながらゴールまでのカウントダウンを豊かに生活していきましょう。
(207HR副担任)